

Becmu №59

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1
早稲田大学文学部ロシア語ロシア文学コース室
tel: 03-5286-3740
e-mail: robun@list.waseda.jp
<https://www.waseda.jp/bun-russia/>

- 「バジョーフ作『石の花』をめぐって
—日本の翻訳者たちはどのように作品と向き合ったのか」傍聴記 佐藤嵩矩
- ウクライナの「戦争と平和」 和田達朗
- 会員の最新情報
- 『ロシア文化研究』第30号のご案内
- 早大ロシア文学会維持会員制度についてのごお願い
- 学会だより

会員の近況より

*2023年1月28日に早大露文学会では、講演会を開催しました。この講演会の傍聴記を大学院ロシア語ロシア文化コースの佐藤嵩矩さんにお寄せいただきました。また、前号(No. 58)でウクライナへの人道支援のための募金について訴え、さらに、1月28日の特別追加講演会で登壇してくださった和田達朗さんにもご寄稿いただきました。

「バジョーフ作『石の花』をめぐって

—日本の翻訳者たちはどのように作品と向き合ったのか」傍聴記

佐藤嵩矩

2023年1月28日に開催された早稲田大学露文会秋季公開講演会にて、南平かおり先生が「バジョーフ作『石の花』をめぐって—日本の翻訳者たちはどのように作品と向きあったのか」と題して講演されました。南平先生は同タイトルの論文で日本児童文学学会創立60周年記念論文の佳作入賞を果たしており、今回はその内容をお話して頂きました。本講演会はZOOM上で開催

されたため、例年に比べ多くの方が参加して盛況でした。

南平先生のご発表は、バジューフの『石の花』を含む『孔雀石の小箱』（1939年）の創作意図について、および1953年から1963年にかけて日本の翻訳者たちが『石の花』をどのように捉えたかに分かれています。

まず初めに、論文を執筆する経緯のお話がありました。このたび南平先生は、小学館世界文学館（2022年11月22日刊行）の翻訳作業に参加されましたが、これまで何度も訳されてきた『石の花』の新訳を出す意義を考えました。改めて本作品に注目すると、面白いことに気づいたとのこと。それは、本作を含む『孔雀石の小箱』の副題が「スカース」となっていることです。「スカース」とは語り手が見聞き・経験したことを伝える形式の文学作品のことを言います。しかし、本作はバジューフ自身が幼い頃に鉱山労働者から聞いたウラル地方の昔話をもとにしていることから、フォークロアの記録集、つまり「スカースカ」に分類されるのではないかと長年議論されてきたようです。最終的に『孔雀石の小箱』は、ウラル地方のフォークロアにバジューフが手を加えて創作した文学作品だということで議論は収まりました。しかし、何故このような議論が持ち上がったのか、そもそも「スカース」と題した作者の意図は何なのかを探るため、南平先生は、作品の書かれた30年代から遡り、ソ連の成立した20年代におけるソ連児童文学界の動向に目を向けました。

1920年代から1930年代にかけて、同国では児童文学が重要な教育政策の武器として活用されていました。その中心人物だったのが作家ゴーリキーで、子どもたちが楽しめる本を通じて識字率向上や社会の仕組みを教えることなど、新時代を担う世代に向けた教育を主張しました。その後、全体主義的な風潮が強まっていくにつれて、文学の在り方にも制約が課されるようになりました。その中で比較的制約が緩かった児童文学界に大人向けのアヴァンギャルド作家が避難したことで、その内容はさらに豊かとなり、黄金時代を迎えました。しかし、スターリンが権力を掌握すると、児童文学界にも制約が及ぶようになり、体制派の批評家から現実離れしたファンタジーやおとぎ話が攻撃にさらされるようになりました。そして、1934年に社会主義リアリズムが採用されると、児童文学においても労働者を主人公とした「労働者のフォークロア」が推奨されました。こうした社会的要請が、バジューフ—鉱山労働者の生活を間近で見ていただけでなく、国語教師・ジャーナリストの経験を持っていた—にとって『孔雀石の小箱』を発表する大きな原動力になったのです。

ここで改めて副題の「スカース」に話が戻ります。南平先生の考えによると、作家があくまでも「スカース」と題したのは、本作のもととなる昔話が当時の労働者のあいだで実際にあった話だと信じられていたことを強調する意図があったからです。また、社会主義リアリズムの名のもとに荒唐無稽なファンタジーやおとぎ話が攻撃されていたため、作家は本作を「記憶の再現」と曖昧な言い方をしたとのこと。

次に、初期（1953～1963）の翻訳においてに日本の翻訳者が本作をどう捉えていたのかに話に移ります。『石の花』はロシア語の専門家・非専門家により、これまで何度も紹介されてきましたが、南平先生は、「スカース」と「スカースカ」の区別を翻訳者らが意識していたかに注目し

ています。当初、両者の区別はついておらず、バジューフの集めたウラルの民話だと誤って紹介されることもありましたが、その一方で語り手の存在に着目して（もっとも翻訳の際には児童向けであることを優先して省かれることも）、従来の昔話とは趣を異にすることを感じ取った訳者もいたようです。そして、時間の経過とともに、バジューフの意図する「スカース」の意味が感じ取られるようになり、作家の聞いた昔話に手を加えた創作物であるという認識が形作られていったとのことでした。

ここから個人的な感想を述べますと、南平先生の発表は順を追った構成になっており、児童文学に疎い筆者であっても置いてきぼりにされことなく、最後まで興味を絶やさずに拝聴できました（お恥ずかしいことに、『石の花』を読んだことがなかったので、本講演会が終わるや、すぐに同書を手に取りました!）今回、鍵となる副題の「スカース」という言葉は、我々日本人が普通に読むときには、目を向けることなく読み飛ばしてしまうことでしょう。しかし、一つの単語の裏に当時の緊迫したソ連文壇が広がっており、その中で活動した作者の意図が隠れていたことが明らかになりました。研究者を志望する自身にとって、今回の南平先生のように丁寧に作品と向き合う姿勢が如何に重大であるかが深く感じられました。

（大学院修士課程 3 年）

ウクライナの「戦争と平和」

和田達朗

第一子の里帰り出産という形で 2019 年夏に妻の郷里であるオデッサに移住し 2 か年半を暮らした。今も現地には妻の両親を残しており私もいわばウクライナ戦争の半当事者としてこの 1 年余りを生きている。目下の悩みのタネは、妻が夏の里帰りを希望して止まないことである。妻は MΓY（モスクワ国立大）在学中もかつて私と日本で暮らしていた時期も、実家に帰らぬ丸一年というものを持ったことがなかった。妻と両親の精神的紐帯は強い。また初孫をその手に再び掻き抱くことをじじばばは切望している。それだけでなく東京の夏は北国生まれのわが妻には暑すぎる。去年はさすがに我慢したが、今年こそは必ずや夏の 1 か月をオデッサで過ごしたい、と。

だが私としては、到底これに同意できないのである。2022 年 3 月にウクライナを出国した、そのときとほとんど同じ理由で、今ウクライナに帰ることはできない。私も、妻も、ましてや子供は。

先日はビデオ通話で義父母にも諭された。見よ、ダーチャ（オデッサ郊外にある）は花盛りだ、オデッサは事もなしだ、ドンバスではこれから 4 年でも 5 年でも戦争をやるとよい、オデッサには関係がない。オデッサは昨日も、今日も、明日も平穏だ。

これに対する私の反論は、今日の平穏は明日の平穏を約束しない、ということに尽きる。ウクライナの反転攻勢が近く行われ、その本命が南部（ザポロージェとヘルソン）であるとは衆目の一致するところ。南部が激戦地となればオデッサが策源地と見なされミサイルが頻々と飛んでくるようになるだろう。ザポロージェ原発で破局的事象が生じる／引き起こされる可能性も忘れ

るべきでない。これらのことが確実に起こるとは言わないが、それでも起きうる以上は、妻や子をかの地へやるわけにはいかない。あの2月24日を経験した人たちが「明日の平穏」についてどうしてそんな楽観的なことが言えるのかと、いっそ憤ろしいような気持ちにもなる。

だが考えてみると、義父母の状態は、ロシアのウクライナ侵攻前夜の私の心持ちそのままなのだ。私は当時「二つの現実」ということをよく言っていた。ネットにつながれば皆さん日本語であれこれ不穏な話をされていて不安にもなる。だが画面から目を離せば、そこにはいつもの冬、いつもの街、いつもの人たちがいるのみ。結局私たちは「侵攻なんてないんじゃないか、あっても大丈夫なんじゃないか」と言って残留を決めた（そのことで知らない人たちから Twitter で随分バカにされもした）。どだい人間は、たとえ情報空間で何が言われていようと、目に視え身体で感じられるものから、現実というものを構成しないわけにはいかない。昨日が無事であり今日が無事なのであれば、明日も無事であるとするのは、感性にとっての真実である。この真実は外部から破壊できない。

だから私には、たぶん義父母を説得することができない。それゆえに気が重い。私は彼らから娘と初孫を奪い続けるものとなる。オデッサに自爆ドローンが飛来したとかいうニュースに触れるたび、これで分かってくれるだろうかなどと思ってしまう自分がある。

この戦争は私に新しい戦争の「像」を教えた。国家による戦争と平和な市民生活は共存するという。全面戦争を戦う国家の内部にあって、ある街・ある家庭がほとんど完全な平穏を保っているさまは驚くほどだ。だがどの街・どの家庭がそれに該当するかは、すべて「今のところは」という限定をつけてしか言えない。「今のところ」オデッサは無事である。私らの家族は無事である。だが明日もそうかどうかは分からぬ。いつ誰が選に漏れるとも知れない。この戦争が私に教えたもうひとつのこと——戦争は変容し、伸縮し、そして過つ。国家が全面戦争を行っているとき、その国家の内部に確証的に安全な場所はない。すべての人が「明日の平穏」への約束を奪われている。妻や子を今あちらへやれないのはそういうわけだ（だがそう言っても義父母には理解されないだろう）。

(露文 2010 年卒)

2023 上半期会員の新刊情報 (2023 年 6 月 1 日調べ)

* 著書を上梓された会員の方は、ぜひ編集部までご一報ください *

阿部昇吉『ロシア文学カフェ：心の雑記帳』ペーパーバック版、Independently published (2023/3)

五木寛之著『折れない言葉 II』毎日新聞出版(2023/2)

五木寛之著『人生のレシピ：健やかな体の作り方』NHK 出版(2023/2)

五木寛之著『うらやましいボケかた』新潮社(2023/3)

五木寛之著『シン・養生論』幻冬舎(2023/3)

五木寛之著『人生のレシピ：疲れた心の癒し方』NHK 出版(2023/4)

五木寛之著『特別愛蔵版 親鸞 青春篇』講談社(2023/4)

五木寛之著『セレクション II 【音楽小説名作集】』東京書籍(2023/4)

五木寛之著『新・地図のない旅 I』平凡社(2023/5)

五木寛之著『私たちはどのように生きるべきか』平凡社(2023/5)

伊東一郎著『スラヴ民族の歴史』山川出版社(2023/2)

海野弘著『アジア・中東の装飾と文様』パイ インターナショナル(2023/5)

鎌田慧ほか著『近代日本を作った一〇五人：高野長英から知里真志保まで』藤原書店(2023/4)

河村彩訳、ボリス・グロイス著『ケアの哲学』人文書院 (2023/6)

黒岩幸子ほか著、戦争史研究会編『ソ戦争史の研究 編：日ソ戦争史研究会』勉誠出版(2023/2)

小林潔著『ロシア文字への旅』Independently published(2023/4)

坂庭淳史著、アレクサンドル・プーシキン著『小学館世界J文学館 プーシキン作品集』電子書籍版、小学館 (2023/2)

東海林さだお著『ショージ君、85歳。老いてなお、ケシカランことばかり』大和書房(2023/1)

東海林さだお著『大盛り！ さだおの丸かじり 酒とつまみと井と』文藝春秋(2023/1)

東海林さだおほか著『ぱっちり、朝ごはん』河出書房新社(2023/2)

東海林さだお著『よりぬきマンガ&エッセイ：ショージ君の「サラ専」新聞』講談社(2023/3)

東海林さだお著『パンダの丸かじり』文藝春秋(2023/4)

白石治朗訳、ロバート・コンクエスト著『悲しみの収穫：ウクライナ大飢饉スターリンの農業集団化と飢饉テロ』恵雅堂出版(2023/3)

高柳聡子訳、ダリア・セレンコ著『女の子たちと公的機関：ロシアのフェミニストが目覚めるとき』(2023/2)

多和田葉子著『パウル・ツェランと中国の天使』多和田葉子文藝春秋(2023/1)

多和田葉子ほか著『随筆集 あなたの暮らしを教えてください 1 何げなくて恋しい記憶』暮らしの手帖社(2023/3)

多和田葉子著『星に仄めかされて』講談社(2023/5)

多和田葉子著『白鶴亮翹』朝日新聞出版(2023/5)

戸田裕之訳、ジェフリー・アーチャー著『ロスノフスキ家の娘 上』ハーパーコリンズ・ジャパン(2023/4)

戸田裕之訳、ジェフリー・アーチャー著『ロスノフスキ家の娘 下』ハーパーコリンズ・ジャパン(2023/4)

南平かおり訳、パーヴェル・バジョーフ著「石の花」『小学館世界J文学館』電子書籍版、小学館 (2023/2)

坂内徳明著『女帝と道化のロシア』京都大学学術出版会(2023/2)

三浦清美訳『中世ロシアの聖者伝 (一) モスクワ勃興期編』松籟社(2023/1)

三木卓ほか著『随筆集 あなたの暮らしを教えてください 2 忘れないでおくこと』暮らしの手

帖社(2023/3)

水野忠夫著『ロシア・アヴァンギャルド：未完の芸術運動』筑摩書房(2023/6)

村山久美子監修、工藤純子著、佐々木メエ絵『リトル☆バレリーナ きらめきストーリー☆3つ』

Gakken(2023/3)

藻利佳彦著『改訂版 耳が喜ぶロシア語：リスニング体得トレーニング』三修社(2023/1)

『ロシア文化研究』第30号のご案内

2022年度の早稲田大学ロシア文学会会誌『ロシア文化研究』第30号が2023年3月末に刊行されました。本号をご希望の方は、「早大ロシア文学会維持会員制度についてのご希望」をご覧くださいの上、同封の払込用紙の通信欄に「第30号希望」と記し、維持会費としてお振込みください（原則として、本誌は維持会員の方々にお分けしております）。

『ロシア文化研究』第30号目次

【論文】

- 坂庭淳史 19世紀ロシアのカトリック：イヴァン・ガガーリンのチュッチェフ、スラヴ派との対話
- 赤渕里沙子 笑いの社会性へのまなざし——A. B.ルナチャルスキーによる風刺ジャンル研究委員会創設をめぐって

【研究ノート】

- 梶内裕子 「元学生」とは何者か——『罪と罰』におけるラスコーリニコフの自負——

【資料紹介】

- 西角美咲 『ルーシの地の修道院院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』翻訳・注釈および解説①

【書評と紹介】

- 望月哲男 佐藤雄亮著『トルストイと「女」 博愛主義の原点』（早稲田大学出版部 2020年）
- 町田航大 井桁貞義・伊東一郎編『ドストエフスキーとの対話』（水声社 2021年）
- 堀江広行 三浦清美訳・解説『中世ロシアのキリスト教雄弁文学（説教と書簡）』（松籟社 2022年）
- 町田航大 井桁貞義・伊東一郎編『ドストエフスキーとの対話』（水声社 2021年）
- 神岡理恵子 ポスト・ソヴィエト文学研究会編著『現代ロシア文学入門』（東洋書店新社 2022年）
- 野中進 三浦清美著『ロシアの思考回路 その精神史から見つめたウクライナ侵攻の深層』（扶

早大ロシア文学会維持会員制度についてお願い

早大ロシア文学会の「維持会員制度」は、すでに多くの方々からのあたたかいご支援を頂戴しております。おかげさまで、毎年『ロシア文化研究』を発行することができております。『ロシア文化研究』発行の他にも、ニュースレター「ヴェスチ」の発行・送付、春季公開講演会の諸費用等にも、皆様より寄せられた会費が充てられております。

この制度は、会員の方々から広く「維持会員」を募り、維持会員になって頂いた方には、その年度の『ロシア文化研究』を年度末の発行に際して1冊お送りするという制度です。学会誌・ニュースレターの発行、講演会の諸費用等は大学からの補助だけではまかないきれません。会員の皆様には、本学会が担い続けている、日本のロシア文化研究の中心的役割をお察しのうえ、ぜひともご支援をお願い申し上げる次第です。一人でも多くの方々のご支援を賜りますよう、お願いを申し上げます。維持会員になっていただけます方は、以下の要領にてご送金くだされば幸いです。

- (1) 年会費は1年につき2,000円となります。
- (2) 維持会員費納入には、同封の郵便振替用紙をご利用ください(口座番号 00160-7-87172 加入者名 早稲田大学ロシア文学会)。差出人欄には、住所と氏名だけでなく、郵便番号と電話番号も必ずお書きください。
- (3) 複数年のお振込みをいただいた方には、自動的にその年度発行分以下、『ロシア文化研究』を、発行され次第、順次、送本申し上げます。
- (4) 『ロシア文化研究』は、年度末に発行されます。従いまして、前年度の『ロシア文化研究』をご希望の方は、振込用紙の通信欄に、その旨、お書き添えください。

少しでも多くの皆様のご協力とご支援を重ねてお願い申し上げます。

学会だより

- 2023年3月に文学部ロシア語ロシア文学コースから8名が卒業しました。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程の修了者は2名でした。
- 2023年度の文学部ロシア語ロシア文学コースへの進級者は5名でした。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程への入学者は5名、博士後期課程への入学者は3名でした。
- 2023年1月28日、南平かおり先生(早稲田大学文学学術院非常勤講師)をお招きし、秋季公開講演会が開催されました。この講演会の傍聴記はニュースレター本号に掲載されています。また、本講演会終了後、引き続き「ロシアによるウクライナ侵攻に関わる特別追加

講演」として会員の林愛子氏（露文 2015 年卒）と和田達朗氏（同 2010 年卒）の両氏に、ご講演をいただきました。

- 2022 年度春季公開講演会・総会が 7 月 22 日（土）に催されます。詳しい日時・場所につきましては、以下をご覧ください。

** ヴェスチに情報掲載を希望される方は、編集部まで原稿をお寄せください **

2023 年度春季公開講演会・総会のお知らせ

早稲田大学ロシア文学会では、7月22日（土）に2023年度春季公開講演会・総会を行います。今回は本学文学学術院講師（任期付）の安野直氏に「〈LGBTQ〉からロシア文化の世界へ」と題してご講演いただきます。

なお、総会は講演会終了後に引き続き執り行います。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

●講演会

日時 2023年7月22日（土）
午後14時30分から16時

会場 早稲田大学戸山キャンパス 34号館 151教室

●演題

「〈LGBTQ〉からロシア文化の世界へ」
安野直氏（早稲田大学文学学術院講師（任期付））

●総会

会場 講演会終了後、同じ34号館151教室にて開催します